

世間の住み難きことを哀しぶる歌一首

八〇四番

世の中の すべなきものは 年月は 流るごとし とり
続き 追ひ来るものは 百種に せめ寄り来る 娘子らが
娘子さびすと 韓玉を 手本に巻かし よち子らと 手携
はりて 遊びけむ 時の盛りを 留みかね 過ぐしやりつ
れ 蜷の腸 か黒き髪に 何時の間か 霜の降りけむ 紅
の 面の上に いづくゆか 皺が来りし ますらをの 男さ
びすと 剣大刀 腰に取り佩き さつ弓を 手握り持ちて
赤駒に 倭文鞍うち置き 這ひ乗りて 遊びあるきし 世
の中や 常にありける 娘子らが さ寝す板戸を 押し開
き い辿り寄りて ま玉手の 玉手さし交へ さ寝し夜の
いくだもあらねば 手束杖 腰にたがねて か行けば 人
にいとはえ かく行けば 人に憎まえ 老よし男は かく
のみならし たまきはる 命惜しけど せむすべもなし

反歌

八〇五番

常盤なす かくしもがもと 思へども 世の理なれば 留
みかねつも